ISSN 2189-8731

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.86　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2023 年 10 月

主な記事

米軍政期奄美の写真展プロジェクト　（河合　渓）　p1
学生奮闘記「甑島列島フィールドワーク調査」（中林真梨萌）　p3
フィールドこぼれ話「熱帯果樹の季節」（香西直子）　p10
連載　世界島めぐり　第九回　「コスラエ島　ミクロネシア連邦」（大塚　靖）　p11

米軍政期奄美の写真展プロジェクト

国際島嶼教育研究センター
河合　渓

2023 年 12 月 25 日は、奄美群島の本土復帰 70 周年にあたる。この節目の年を記念して米軍政下の奄美をカラー写真で紹介するイベントの企画が進行中である。事の発端は、2017 年から 2018 年にかけて 1 年間奄美大島龍郷町で大島紬に関する人類学的調査を行なったオックスフォード大学人類学・博物館民族誌学科講師シャーロット・リントン博士が、2019 年 4 月にアメリカ・ニューヨーク州のシラキュース大学図書館のアーカイブで米軍政下の奄美のカラー写真と八ミリフィルムを発見したことにある。アーカイブの主は 1951 年 9 月から半年間、アメリカ軍の依頼で軍政下の奄美大島で文化人類学的調査を行なった同大学のダグラス・G・ハーリング教授である。

リントン博士は 2019 年 4 月にシラキュース大学アーカイブを訪れ、埃っぽい箱を 3 日間探し回ってハーリング教授が撮影した当時の奄美のカラーのスライド写真と 8 ミリフィルムの発見に至った。写真は全部で約 980 枚あり、彼女はこれらの写真やフィルムがとても貴重なものであることを即座に理解し、これを自分の研究資料としてばかりでなく、奄美の人たちとも共有すべきだと考えた。

リントン博士は、一旦イギリスに戻ると、2019 年 6 月に、当時、鹿児島大学法文学部の桑原季雄教授（現名誉教授）にハーリングのアーカイブ写真の存在をメールで知らせてきて、写真も送ってきた。桑原教授は彼女とこれらの写真を写真集や写真展という形で奄美の人々に還元できないか意見を重ね、写真プロジェクトを立ち上げた。ところが、その後はコロナウイルスの世界的な感染拡大でリントン博士が渡米や来日ができなくなり、また博士論文の執筆で彼女が多忙を極めたこともあって写真プロジェクトは 2 年近く中断したままだったが、2021 年 4 月にリントン博士から博士論文が終わったのでプロジェクトを再開したいとのメ

ールが桑原教授のもとに届いた。

このプロジェクトの実現には、写真を使用する際の著作権の問題とそのデジタル化のための資金をどうするかという問題があった。また彼女が日本学術振興会の研究助成の申請を行なう際に研究組織に所属している日本側のカウンターパートが必要だということで、同年7月に桑原教授の紹介で、リントン博士が私にプロジェクトへの協力を依頼してきた。その後は各種研究助成の申請やプロジェクトの具体的な計画についてリントン博士と私の間でメールのやり取りが続いた。2022年12月に私の方からリントン博士に、2023年が奄美の本土復帰70周年にあたり、写真展をやるのにタイムリーの年であることや、鹿児島大学や奄美市に写真展のための助成金を申請していることを伝えた。

本年4月にリントン博士が3日間、シラキュース大学アーカイブを再訪し、写真のコピーを約600枚入手したことや、著作権の問題についても一定の解決の目処が立ったとの連絡があり、彼女が入手した高画質の写真のファイルも送られてきた。

その後は、奄美市の方々に少しずつ写真展の話が広まっていくなかで、5月に南海日日新聞の一面に12月からのハーリング写真展についての記事が掲載され、また助成金も奄美群島拡域事務組合と鹿児島大学から支給された。7月に島嶼研センター奄美分室で関係者を集めて写真展の日時や開催場所について打合せを行ない、12月23日（土）午後に講演会と写真展を奄美市文化交流センターで開催し、翌年1月から写真展を奄美大島の5市町村で順次開催することが決まった。奄美群島での巡回展も予定し、4月に鹿児島大学で開催して終了する。また、ハーリング教授の写真から8つのテーマを選び、写真エッセーを地元の人に執筆してもらい、10月から南海日日新聞紙面で順次掲載されている南日本新聞やＮＨＫも12月の写真展に先立って、新聞紙面やＴＶ番組で軍政下の奄美の写真を一部公開する運びとなった。

2019年6月に軍政下奄美の写真の存在についての連絡を受けて、リントン博士、桑原教授、私の3人で奄美での写真展の企画を立ち上げてから4年が経過した。その間、コロナウイルス禍やリントン博士の博士論文執筆による中断、写真展実現のための資金獲得や著作権問題の解決などいくつかの問題があったが、本土復帰70周年という節目が、行政や大学、各種団体やマスコミ関係者を動かし実現に漕ぎ着けようとしている。願わくは、できるだけ多くの人々に終戦直後の米軍統治下の奄美の人々や奄美大島各地の土地や産業など多様な風景を見てもらい、70年前と現在の奄美の姿に様々に思いをめぐらし、後世に語り継いでいく機会となることを願う。

奄美大島で調査を行なったダグラス・ハーリング教授
（シラキュース大学図書館、特別コレクション研究センター、大学アーカイブ、ダグラス・ハーリング論文、 Douglas Haring Papers, University Archives, Special Collections Research Center, Syracuse University Libraries）

学生奮闘記

甑島列島フィールドワーク調査　―甑島花崗岩の起源を探るー

中林真梨萌（鹿児島大学理学部地球環境科学科）

鹿児島県北西部に位置する甑島列島は主に上甑島、中甑島、そして下甑島の 3 島から構成されています。この甑島列島では上部白亜紀系の姫浦層群と古第三系の上甑層群の堆積岩類、そして新第三系の花崗岩類が見られます。特に姫浦層群は海生や非海生動物の化石が含まれていることから古くから調査が行われ、近年では恐竜化石の発見により注目度が高まっています。これについては、後述の調査にご協力いただいた山下さんが所属する甑ミュージアムに詳しいでしょう。一方で姫浦層群を含む堆積岩類が注目を集める中、上甑島および下甑島に分布する花崗岩の詳細な研究は近年ほとんどなされていませんでした。臼杵-八代構造線の境界付近にちょうど位置する甑島花崗岩類は、地理的に非常に興味深い岩体といえます。この花崗岩類の形成履歴やマグマの起源を明らかにすることは、鹿児島北部の形成史を理解する上で非常に重要となります。

そこで私たちの研究室では、甑島でフィールドワークを行い、露頭観察と岩石の採取を実施しました。フィールドワークでは、甑ミュージアムの恐竜化石等準備室の学芸員である研究室のOB、山下さんにも協力いただき、甑島全周を車で調査しました。甑島の美しい海岸や豊かな自然が広がる山や沢で露頭観察を行えるのは、実地調査における醍醐味です。このような自然に触れ合えたのは自身の学生生活の中でも非常に良い経験となりました。またこの宿泊中にいただいた地元の伊勢海老もよく覚えています。さて、フィールドワークの結果、露頭観察より得られた情報は以下のとおりです。①下甑島では比較的優白色で粗粒の花崗閃緑岩、上甑島では灰白色からやや青っぽい細粒の花崗閃緑岩から閃緑岩により構成されていました。②下甑南部の海岸では、特徴的な火山岩性捕獲岩が見られました。他にも露頭観察ではさまざまなことがわかりましたが、これらは、南北で岩石の来歴が異なることを裏付ける特徴といえます。

採取後の岩石は研究室に持ち帰り、詳細な分析をおこないました。その結果、甑島列島に分布する花崗岩類の U-Pb 放射年代は、約 10Ma と、当時私たちのグループで調査していた鹿児島県本土の花崗岩類よりもやや若いことが分かりました。また、甑島花崗岩類は、鹿児島県本土の花崗岩に比べて苦鉄岩質であり、玄武岩質マグマ成分を含む地殻の部分溶融によって形成された花崗岩類であることを示唆しています。したがって、甑島花崗岩は他の外帯花崗岩とは異なる火成活動に関連していると推測されました。この結果は研究室で論文としてまとめ、県内の地質学会誌に寄稿させていただきました。この研究が自身の記録として残り、今後の研究に生かされていくことを嬉しく思います。私の卒業研究はここで区切りとなりましたが、この結果を踏まえ、後輩たちのグループが甑島の花崗岩を含む南九州の花崗岩についてさらに調査を進めてくれることに期待しています。

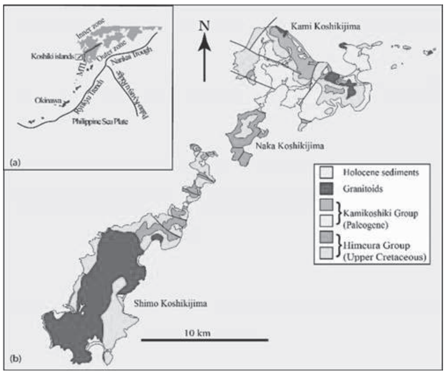


写真 1 甑島の地質図（赤色が花崗岩類）

写真 2 甑島調査風景（写真に写っている人物はハフィーズ先生（左）と山下さん（右））

島嶼研シンポジウム「甑島列島の魅力と可能性を探る」

2023年3月11日に「甑島列島の魅力と可能性を探る」が開催されました。新型コロナウィルス後のため対面とオンラインの併用のシンポジウムで、沢山の方々が参加してくださり、お陰様で大変盛況なシンポジウムでした。

シンポジウムのポスター

趣旨

甑大橋が2020年8月に開通し甑島列島の3つの島が橋で繋がりました。このことは甑島列島があらためて注目されることになりました。甑島列島には風情ある武家屋敷跡や、2009年にユネスコの無形文化遺産に登録されたトシドンなどの世界的に注目される文化を有するほか、変化に富んだ海岸線や8000万年前の地層など、文化や自然の豊かな島です。また、恵まれた漁場があり、水産資源も豊富です。このような魅力が多くそなわる地域にもかかわらず、過疎化や海上交通に限定される交通手段の影響もあり、その地域の魅力が十分には発揮されているとはいえません。鹿児島大学国際島嶼教育研究センターでは2018年より甑島列島総合調査として、鹿児島大学のさまざまな分野の研究者とともに学術調査を行ってきました。その成果は来年度に「The Koshiki Islands」として出版される予定です。本シンポジウムではその成果の一部と、地元の研究者の活動、またそれらの研究と地元を繋ぐ活動を紹介して、甑島列島の新しい魅力を探り、将来に向けての可能性を考えていきます。

1) 甑島列島の地質と化石

三宅優佳
（薩摩川内市企画政策課）

甑島の象徴とも言える、見るものを圧倒する大迫力の断崖や数々の奇岩。甑島の海岸の大部分は岩石海岸で、白亜紀後期及び古第三紀の堆積岩類、中新世閃緑岩類が波食を受けて海岸となっている。

その断崖を構成する白亜紀後期の地層である姫浦層群は、上甑島の西部と中甑島、下甑島に分布する。2009年に初めて、下甑島の姫浦層群から恐竜やカメ類、ワニ類、魚類などの脊椎動物化石が報告され、その後、より上位の地層である上甑島の姫浦層群からも恐竜を含む脊椎動物化石が見つかった。恐竜を含む脊椎動物化石群集として、日本で最も新しい時代のものである可能性が示唆されており、恐竜絶滅前のアジアの恐竜の多様性や生態について解明するためにも、今後の成果が期待されている。さらに、上甑島の大部分と中甑島の北端部には、上甑島層群が分布する。近年、上甑島層群中甑層からは、国内最古の古第三紀哺乳類化石群集が報告されており、前期始新世の大陸間の哺乳

類の進化と変遷史を調べるために研究が進められているところである。

甑島の自然、風土、文化、産業などは、それらが根付いた土地、つまり甑島を構成する地層や地形に大きく左右されている。甑島の多くのものが地質的・地理的資源に育まれているため、地域振興の資源としても貴重である。

2）甑島で古くから伝えられてきたカンキツ

山本雅史
（鹿児島大学農学部）

甑島では経済活動としてのカンキツ栽培は行われていないが、古来、様々なカンキツ類が庭先等で栽培されてきた。これらは、遺伝資源として貴重であるだけでなく島の文化を担う文化資源としての価値も高い。そのため、これらの栽培保存となる基礎情報を得るため、上甑島と下甑島で在来カンキツを調査した。甑島全体で栽培されているキノスはダイダイ、キネブはクネンボで、これらは甑島以外の鹿児島県島嶼域で確認できる導入種である。コウズミカンはクロシマミカンと考えられ、これも島嶼域で広く観察される。シロミカンおよびホックイは南西諸島にも分布しているカンキツと同じものと考えられた。一方、イシミカン、トウミカン、ガーガー、ニタイ、ゴダユウ、ヤマタテ、ガラガラミカンの同定はできなかった。今後これらの来歴を解明する必要がある。

3）甑島漁業の現状と今後の展望

鳥居享司
（鹿児島大学水産学部）

甑島の基幹産業は水産業であり、鹿児島県内有数の生産を誇ってきた。周辺ではキビナゴを始め、ブリ、バショウカジキ、タカエビなど多様な魚介類が水揚げされてきた。しかし近年、水揚げの不振が続いており、甑島での漁業経営は厳しさを増している。漁協の経営をリードする漁協も職員の高齢化と減少により、新たな事業に手を付けられない状況下にある。

漁業経営の悪化に危機感を抱いた漁業者を中心に、漁獲物の生産から販売を担うことができるグループが立ち上がった。取り組みは緒に就いたばかりであるが、新たな販売先も確保できており、甑島漁業を支える母体として期待されている。

4）甑島の食文化ストーリー「旅と暮らしと食さんぽ」

大脇裕美
（甑の旅ソムリエ協議会）

私たち甑の旅ソムリエは、甑島の自然、そこに暮らす人々の文化の保護・継承・解説・発信などを通して、その資源のモニタリングや体験プログラムの企画・実施をしています。そのひとつである「食文化ストーリー」のプログラムは、島の暮らしと観光、そして食文化を掛け合わせて、甑島の食文化の継承の芽を育てていくきっかけづくりにチャレンジしています。

島の食文化は、島内にある限られた食材の中で、工夫してつくられ、それぞれの集落で歴史的な背景や暮らしによる違いがあります。食文化を知ることは、その地の歴史を知ることでもあり、先人たちの知恵を学ぶことでもあります。暮らしに根差した食文化は、島の暮らしの糧になり、人々の思い出を紡いでいき、思い出は生きる力となり、島の誇りに繋がると思い活動しています。

今回は、島のあちこちで出会う「すす」に着目し調査を進めることで、いろいろな食に出会うことができました。

甑島ならではの暮らしに触れる「食文化ストーリー」をお伝えします。

国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第228回　2023年4月24日

奄美群島の宗教文化と神社の関係について

町　泰樹
（鹿児島高専一般教育科）

奄美群島は、琉球にルーツを持つノロ（女性神役）による村落祭祀やユタのシャーマニズムといった在地の宗教文化を有する地域として知られている。こうした在地の宗教文化は、明治期以降、廃仏毀釈や外来宗教の導入によって衰退してきた。ただし、在地の宗教文化と外来宗教との関係は、対立的なものだけではなく融和的なものもある。とりわけ神社は、廃仏毀釈の際には在地の宗教文化を抑圧する存在として立ち現れる一方で、ノロたちの祭場でもあった神社や在地の英雄譚から創建された神社が存在するなど、在地の宗教文化の受け皿としても機能してきた。発表者は、近現代における奄美群島の宗教文化の変容に関心を持ち、出身地である与論島の葬制の変容や、民俗信仰と神社の関係について研究を行ってきた。本発表では、発表者のこれまでの研究を概略的にたどりながら、奄美群島の宗教文化を理解するために神社に着目する意義を確認する。その上で、奄美群島における神社や、その管理を担っている人々の語りから、在地の宗教文化と神社との関係について考えていきたい。

町　泰樹氏

第229回　2023年5月29日

ザンジバルのダガー産業：内陸国へのタンパク質食料供給としての意義

藤本麻里子
（鹿児島大学水産学部）

タンザニアのインド洋島嶼地域ザンジバルでは、カタクチイワシの漁業と煮干しへの加工産業が盛んです。カタクチイワシをはじめ、小魚全般をスワヒリ語でダガー（dagaa）と呼びます。ダガーはタンザニアの国民食ともいえるほど身近で重要なタンパク源です。本発表ではタンザニア各地のダガー加工産業を紹介し、特にザンジバルにおける煮干し加工産業に焦点を当てます。

ザンジバルはタンザニアの首座都市ダルエスサラームからフェリーで 1 時間半ほどの距離にあります。この離島地域に、内陸のコンゴ民主共和国（以下、D.R.コンゴ）から多くの商人が訪れ、煮干しを大量に買い付けて本国へ送っています。D.R.コンゴでは 90 年代に勃発した内戦とそれに伴う政情不安で、人々の生活インフラは破壊されました。多くの難民が、熱帯雨林の森で野生動物をタンパク質食料として利用せざるを得ない状況が続きました。野生動物は急減し、近年は人々のタンパク源は獣肉から水産物へシフトしています。

発表者はザンジバルにおけるカタクチイワシ漁、仲買加工産業および、コンゴ人商人と産地仲買人の取引慣行などを調査し、そのフードチェーンを明らかにしてきました。また、D.R.コンゴの都市ルブンバシにおける調査から、ザンジバル産ダガーが D.R.コンゴのみならず周辺国にも流通していることがわかりました。本発表では、ザンジバルのダガー産業を紹介し、内陸国へのタンパク質食料供給という観点からその意義を検討します。

藤本麻里子氏

第230回　　2023年6月19日

奄美群島における焼塩土器の基礎的研究

與嶺友紀也
（伊仙町教育委員会）

これまで古代九州の焼塩土器（布目圧痕土器）が奄美群島で出土することは知られていた。焼塩土器が九州からの搬入品の一つとされる一方で、奄美群島の在地土器と焼塩土器の胎土が共通することも指摘されていた。すなわち奄美群島内で焼塩土器を生産しており、奄美群島の焼塩土器は貝塚時代後 2 期後半の社会状況を示す遺物の一つになる可能性がある。

そこで奄美群島出土の焼塩土器の詳細な観察を行い、鹿児島本土の焼塩土器と比較を行った。また奄美群島での焼塩土器の出土事例の集成も実施した。その結果、奄美群島の焼塩土器と鹿児島本土のものは器形と内面の布目痕が共通し、胎土・製作方法・年代観が異なることがわかった。

したがって奄美群島内で焼塩土器が生産・流通していたと推定された。同時に古代九州の製塩技術が奄美群島に伝播した可能性が出てきた。そして奄美群島における焼塩土器の出現・展開の背景には、奄美諸島において9世紀後半より本格的な農耕や鍛冶技術を導入したことによる塩の需要の高まりが想定された。製塩場所の候補地としては奄美大島が挙げられ、徳之島や沖永良部島も一部生産に関わっていた可能性がでてきた。そして喜界島は塩の一大消費地であったと考えられた。

與嶺友紀也氏

第231回　　2023年7月18日

一色次郎研究の現在

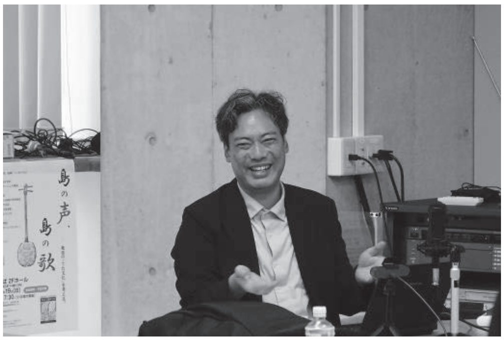
鈴木優作
（鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター）

本発表では、沖永良部島出身の作家・一色次郎（1916–1988）の研究状況について述べる。一色は、「冬の旅」（1949年）および『孤雁』（1961年）で二度の直木賞候補となり、1967年に「青幻記」により第3回太宰治賞を受賞し、1973年に映画化され、海外諸国でも上映された。以後も共編『東京大空襲・戦災誌』（1974年）で菊池寛賞、『サンゴしょうに飛び出せ』（1975年）で産経児童出版文化賞を受賞した。以上のように存命中に活躍した作家であるにもかかわらず、現在沖永良部でも一色を知る人は多くなく、文学史においても顧みられることがほとんどない。発表者は、一色次郎の研究を推進し再評価の機運を高めていきたいと考えている。

まず、これまでの一色をめぐる言説が、結核を患った母との交流をテーマとした「青幻記」、および父の冤罪と死を扱った「太陽と鎖」（1964年）に集中しており、一色文学が「青幻記」以前 - 以後という区分で一般に認識されていることを指摘する。つぎに発表者は総体的に一色文学を捉えるため、新たなより詳しい時代区分を提唱する。①出発点としての、19–20歳にかけて出版した二点の創作集②「青幻記」受賞以前の少年少女向け偉人伝記・冒険小説③②と同時期に文芸誌に執筆した純文学作品④「青幻記」⑤「青幻記」以降、「魔性」（1979年）など自ら参加した死刑廃止運動と関わる作品。

加えて、沖永良部島での調査を含む、一色の

一次資料調査の成果について紹介をしたい。



鈴木優作氏

第 232 回　2023 年 9 月 25 日

奄美の海に暮らすヤドカリとその共生者に関する研究

吉川晟弘
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室）

本発表では、ヤドカリとその共生者の適応進化に関する知見を紹介する。ヤドカリと聞くと、オカヤドカリのような「陸に暮らすヤドカリ」を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、陸上で暮らしているヤドカリはごく少数であり、ほとんどのヤドカリは海の中で暮らしている。これまで演者は、潮間帯を含む浅い海と水深 200m よりも深い深海と呼ばれる海に暮らすヤドカリ、およびその共生者についての系統分類学や行動学的な研究を行ってきた。本発表で演者がこれまで行なってきた研究の成果、特に奄美群島を含む日本近海に生息する種についての知見を紹介することで、多くの人に「海に暮らすヤドカリ」の存在を広めたい。

ヤドカリのほとんどは、巻貝の貝殻を「家」として使う。しかし、その貝殻は既に死んでおり大きくならないため、ヤドカリは成長するためにはさらに大きな貝殻に引っ越さなければならない。特に海に暮らすヤドカリが使う貝殻には、イソギンチャク類や巻貝類などの複数の共生者が暮らしている。これら共生者はヤドカリが引っ越しを行うたびに関係が切れてしまうため、共生を続けることに特化した形態や行動を進化させている。本発表で演者がこれまで明らかにしてきたヤドカリと、その共生者の「貝殻を舞台とした適応進化」を紹介することで、「海に暮らすヤドカリ」を研究することの面白さを共有する。

吉川晟弘氏

特別研究会　2023 年 4 月 10 日

1)　マルタの幸福度を測る

マリー・ブリグリオ
（マルタ大学）

この発表では、幸福と幸福度に関する最新技術の概要を説明する。そして、幸福度に関する 3 つの問題について考えていく。(1) 幸福度はどのように測るのか (2) 幸福度を高めるものは何か (3) 政府、企業、個人にとってどのような意味を持つのか。さらに、地中海の島国であるマルタの幸福に焦点を当てます。他の国（地中海、ヨーロッパ、世界）と比較したマルタの幸福度の状態や、生活の質に関する課題についての最新情報を共有する。最後に、単なる経済成長ではなく、幸福度を追求するための各国の取り組みについて紹介します。

マリー・ブリグリオ氏

2)　地中海地域における気候変動の影響と気候変動に強い地域づくりについて

ステファノ・モンカダ
（マルタ大学）

この発表では、地中海地域における気候変動の影響について、沿岸地域と島嶼部に焦点を当て、さまざま知識を統合し、気候変動の影響に対応できる持続可能な開発の道筋を明らかにする。地中海沿岸の人口の 3 分の 1（約 1 億 5 千万人）は海の近くに住んでおり、海のすぐそばで開発された基幹施設に依存している。地中海沿岸地域の 40%以上は、建築物やその他の方法で改修工事が施されており、海面上昇と異常気象の組み合わせによって引き起こされる沿岸の洪水や浸食に対して特に脆弱である。さらに、沿岸の帯水層への海水の浸入（海水侵入）や沿岸の生息地の劣化にも脆弱であり、人間や経済活動の集中により、沿岸生態系の劣化が進んでいる。この発表では公平で持続可能な地域づくりのために、沿岸域管理における新たな問題やさまざまな社会経済グループのリスクへ対処するための情報を紹介する。

ステファノ・モンカダ氏

特別研究会　2023 年 4 月 19 日

スポットライトの下で：世界の中心にある島々

ゴドフリー・バルダッキーノ
（マルタ大学）

学問分野には、独自の雑誌、ハンドブック、協会、会議、学位プログラム、推薦図書が必要である。「島嶼学」は、現在、これらすべてを備えている。島嶼学には独自の「研究方法の入門書」も用意されている。それには（特に小さな）島や島民について、島民のために、島民とともに研究を行う際の特別な課題を説明している。この入門書は島の条件である「島性」に注目している。これは、それ自体では何も引き起こさないが、行動やシステムを特定の方法と方向に誘導することができる。したがって、小さな島のシステムでは、経済的独占、社会的親密さ、政治的全体性といった性質が、より大きな本土では通常見られない、独特の「小ささの生態系」を構築している。

本発表では、人類学者マーガレット・ミードの先駆的な著書『サモアの思春期』（1928 年）からまもなく 100 年を迎えるにあたり、「島嶼学」の進化の一端を紹介する。特に、島が、退屈で忘れられた周辺地域でありエキゾチックな研究対象から、人新世の中心的かつ象徴的な存在に、そして 1945 年以降の国際世界秩序の国際関係における主体へと変化していく過程をたどっていく。

ゴドフリー・バルダッキーノ氏

～フィールドこぼれ話～

熱帯果樹の季節

香西直子（鹿児島大学農学部農業生産科学科）

最近、奄美大島でスモモの調査をしている。スモモの産地といえば山梨県や長野県など冷涼な地域だが、じつは奄美大島でも「花螺李（カラリ，ガラリ）」という品種が栽培されている。奄美プラムとも呼ばれるこの品種は、奄美大島での生産量が多い。スモモなので、冬には休眠して春に発芽する、れっきとした落葉果樹である。奄美大島を年中暖かい南の島だと思ってはいけない。奄美大島にも冬があり、春がある。カラリは冬になると落葉するし、開花や収穫にももちろんシーズンがある。開花期には花の調査、収穫期には果実の調査をするのだが、開花期も収穫期も、そのピークはわずか１週間程度である。したがって，調査のためには，そのわずか１週間のピークを狙って現地に行く必要がある。しかし、航空機は予約が遅ければ空席が埋まってしまうため、直前に調査計画を立てるわけにもいかない。早い時には２ヵ月前から調査計画を立てることもある。現地の共同研究者から届く情報を頼りに、慎重に出張日程を決めていく。微妙な駆け引きが、調査の成否を左右する。

開花期に明確なピークがあるのは温帯果樹に限った話ではない。ポスドク時代にはタイでドリアンやマンゴスチンなど熱帯果樹の調査をしていたが、これらにも明確な開花期や収穫期があった。フィールドはタイ東部にあるチャンタブリ県。タイランド湾沿岸部に位置するこの地域は，いわゆる熱帯である。だが、ここにも季節が存在した。雨季と乾季である。乾季には降水量が減り土壌は乾燥する。乾季に吹く北風は、大陸から冷たい空気を運んでくる。ドリアンもマンゴスチンも、乾季になって微妙に低下する気温や土壌乾燥ストレスを受けて花芽を形成する。乾季入りの時期は年によって変動するため、開花期にも年次変動があるが、開花そのものは集中し、その年の「開花ピーク」を形成する。タイ東部でのドリアンやマンゴスチンの開花期は、12月から１月である。ドリアンは夜に開花するため、調査のために 18 時ごろに圃場に出向き、ヘッドライトを点けて 21 時くらいまで作業する。ある年は、大晦日と元日にドリアンの開花調査をしたこともあった。ドリアンは季節に応じて開花するが、年末年始に臨時休業することなどは、もちろんないのである。

このように、スモモもドリアンも、その地域の「季節」で生じる微妙な気象の変化を感知しながら生活環を繰り返しているわけだが、近年問題になっている気候変動は、そのリズムを大きく崩しつつある。奄美大島では、数年前にスモモで記録的な低収量に見舞われ，冬季の気温上昇との関連が指摘されている。ドリアンの産地であるタイ東部では、ここ数年、乾季に大雨が降ることが増えたという。「年次変動」で説明できる範囲をはるかに超えた気象の変化は，今後の果実生産を大きく変えるかもしれない。

写真１ カラリの果実　小ぶりな果実だが甘酸っぱくて美味しい

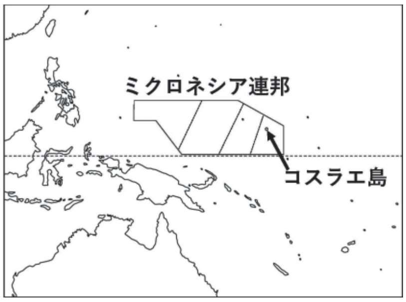
写真２夜に開花するドリアンの花　暗闇で強く甘い香りを放つ

「世界島めぐり」

第九回 コスラエ島　ミクロネシア連邦
(Kosrae Island, Federated States of Micronesia)

大塚　靖（国際島嶼教育研究センター）

コスラエ島は4つあるミクロネシア連邦の州の最も東にあるコスラエ州にある。他の3つの州は中心となる島の他に多くの離島があるが、コスラエ州はコスラエ島とその周辺にある小さな属島からなる。面積は約 111km^2 と沖永良部島より少し大きな島で、人口は約 6,600 人と喜界島とほぼ同じである。コスラエ島は「ミクロネシアの宝石」と称され、2005 年にユネスコの生物圏保存地域に登録されたウトウェ生物圏保護区やコスラエ固有種「カ（Ka）の木」が保護エリアとなっているイエラの森などの豊かな自然だけではなく、レラ遺跡や戦跡など文化の面においても様々な魅力を持つ島である。



コスラエ島地図

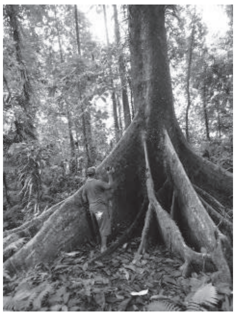


写真１　カ（Ka）の木（盤根を叩くと「コン・コン・コン」という音が返ってきます）

写真２　スリーピングレディと呼ばれるフィンコール山

写真３ レラ遺跡

お知らせ

令和５年３月 31 日をもって宋多情助教が退任され、４月１日から当センター奄美分室に吉川晟弘と牧貴大特任研究員が着任いたしました。吉川研究員は「サンゴ礁生態系における海産無脊椎動物の生物間相互作用に関する研究」そして牧研究員は「森林生態系に生息する哺乳類の保全学的研究

究」をテーマとして研究を行っています。また、昨年度２月に事務補佐の西りつ子さん（鹿児島キャンパス）と本年度８月に財部みのりさん（奄美分室）がおやめになり、新事務補佐として井手元智子さん（鹿児島キャンパス）が採用され、生美香子さん（奄美分室）が産休から戻られました。宋さん・西さん・財部さん長い間ありがとうございました。吉川さん・牧さん・井手元さん・生さん、よろしくお願いします。

最近の出版

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol. 43, No.1-2, 2023

Research Paper

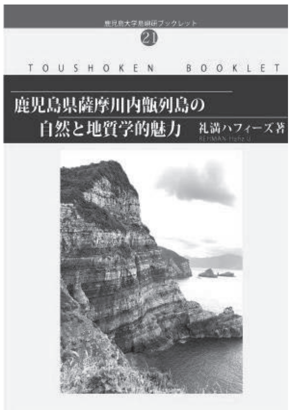
山本雅史・谷佳那美・香西直子：鹿児島県黒島の在来カンキツ

RIWASINO John and WILLIAM Kerua: Evaluating Sustainable Agribusiness Farming Practice in Markham Valley of Huon Gulf District, Papua New Guinea (PNG)

島嶼研ブックレット

No.21　「鹿児島県薩摩川内甑列島の自然と地質学的魅力」礼満ハフィーズ (March 2023)

No.22　「奄美群島の水産業の現状と未来」鳥居享司 (March 2023)



編集後記

奄美も少し肌寒くなり、過ごしやすい日々になってきました。（KK）

島嶼研だより　No.86　令和５年10月７日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html